

令和元年6月15日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02762

研究課題名(和文) 構文の成立過程とその後の展開に関する大規模コーパスに基づいた生成理論的研究

研究課題名(英文) A Large-Scale-Corpus Based Generative Theoretical Study on the Process of Establishment of Constructions and Their Further Developments

研究代表者

大室 剛志 (OMURO, Takeshi)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：70185388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：英語の半動名詞構文(e.g. He spends a few minutes looking at the footprints outside the Chinese Theatre.)の史的成立過程を解明しその後の文法展開として補部位置に形容詞句、過去分詞句が史的にいかにかに生起可能となるかを解明した。そのため史的大規模コーパス The Corpus of Historical American English 等を用い事実調査を徹底的に行った。生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、生成語彙意味論、構文文法といった複数の最先端の言語理論を用いて問題のメカニズムの解明を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

単一の言語理論に留まることなく、半動名詞構文の成立過程とその後の文法展開のメカニズムを解明するうえで、欠くことのできない生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、生成語彙意味論に加えて構文文法といった複数の最先端の言語理論にこれまでの研究の積み重ねで通じているため、多くの言語事実と緻密な事実観察をもたらす現代言語理論の諸理論に対する様々な帰結について考察することが出来た。従って、とかく語法文法家は事実面に片寄り、理論言語学者は理論面に片寄りがちであるが、最先端の言語理論を押し進める実証面と理論面がバランスよく融合した研究成果が半動名詞構文に関して行うことが出来た。

研究成果の概要(英文)：In this research, I explored the historical process of establishment of half-gerund constructions (e.g. He spends a few minutes looking at the footprints outside the Chinese Theatre.) in English and also explored how adjective phrases and past participial phrases were introduced as complements historically after that establishment. To achieve these goals, I investigated the empirical facts on half-gerund constructions thoroughly by using such historical large-scale-corpora as The Corpus of Historical American English. I made an attempt to explore the mechanisms above, using such most up-to-date linguistic theories as generative syntax, conceptual semantics, dynamic theory of grammar, generative lexicon and construction grammar.

研究分野：英語学

キーワード：半動名詞構文 構文の成立過程 構文成立後の展開 生成理論 大規模コーパス 生成語彙意味論 動詞と構文 統語的再分析

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

伝統文法家 Jespersen (1940), Poutsma (1928:903), 中島 (1958), 山川 (1960) は、前置詞inを欠いた英語の半動名詞構文 (e.g. He spends a few minutes *looking at the footprints outside the Chinese Theatre.*) が、対応する前置詞in付きの動名詞構文 (e.g. He spends a few minutes *in looking at the footprints outside the Chinese Theatre.*) から史的に発達した事実は指摘している。しかし、非常に類似した動名詞構文が存在しているのに、半動名詞構文がどのような動機付けにより成立したのか、正確にいつ出現したのかなど、この構文の成立過程については詳しくは解明されていない。また、現代英語におけるこの構文の属性も大規模コーパスを用いて詳細に解明した研究はない。

Poutsma は、前置詞inが削除され、動名詞が predicative adnominal adjunct の文法機能を持った現在分詞の-ing形に変化すると述べている。Poutsma の言う predicative adnominal adjunct は Jespersen の言う準述詞 (quasi-predicative) に相当するので、次の予測として、半動名詞構文が一旦構文として成立すると、その後の文法展開として、現在分詞以外の形容詞句、前置詞句、過去分詞句といったいわば変異形としての有標な他の準述詞が出現すると予測される。

また、Arai (1997) は、*the Oxford English Dictionary (Second Edition) on Compact Disc* をコーパスとして見立てて検索し、半動名詞構文が20世紀前半頃に誕生したと主張するが、Arai の調査は50年刻みの調査をしているので、彼の調査からは半動名詞構文が出現した時期が実際のところ19世紀末なのか20世紀前半なのかは判然としない。

### 2. 研究の目的

本研究の研究目的は研究課題に盛り込んだ次の3点である。(1) 史的に、構文の基本メンバーが成立してから、その後、派生メンバーへと文法展開が起きる。この観点から、英語の半動名詞構文 (e.g. He spends a few minutes *looking at the footprints outside the Chinese Theatre.*) の史的成立過程を解明し、その後の文法展開として、上の斜字体の位置にどのような派生的な述詞要素が史的に生起可能となるか解明する。この構文の現代英語の属性も合わせて解明、分析する。(2) そのため史的な大規模コーパス *The Corpus of Historical American English* 等を用い事実調査を徹底的にする。(3) 生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、加えて構文文法など複数の最先端言語理論によりこの構文および他の関連構文の成立過程とその後の文法展開のメカニズムを解明する。

### 3. 研究の方法

1. 述べた研究の現状を踏まえ、本科研では、まず、1810年から2009年まで10年刻みで歴史変化を調査できる史的な大規模コーパス *The Corpus of Historical American English (COHA)* を用いることにより、半動名詞構文がいつ出現したかを正確に同定することにする。次に、半動名詞構文が成立した後の文法展開として、現在分詞以外の形容詞句、前置詞句、過去分詞句が準述詞として出現するという上記予測が正しいかを、COHAを検索することにより、検証する。さらに、現代英語の大規模コーパス、*The Bank of English* (約5億語)、*The British National Corpus* (約1億語) 等を有効に利用して、この構文の現代英語での属性も徹底的に解明する。ここまでは、かなり経験的実証的な研究を積むことになるが、さらに、生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、生成語彙意味論に加えて構文文法など複数の最先端の言語理論を用いてこの構文の成立過程とその後の文法展開のメカニズムを解明し、さらに現代英語でのこの構文の属性を分析、説明する。

本科研の研究課題を達成するためには、史的な大規模コーパスCOHA、現代英語大規模コーパスBOE (約5億語)、BNC (約1億語) 等を有効利用して、膨大な言語資料を収集する必要がある。というのも、半動名詞構文は、実はさまざまな環境に生じうる構文だからである。He spent three years/was two weeks/won't have a hard time/had difficulty/was very busy/kept himself at work/was already hard at work/had

been at work/etc. *learning to use his flippers*. そうして得た膨大な言語資料を、複数の最先端の言語理論、生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、生成語彙意味論、構文文法などの観点から、細かく観察し、鋭く深く分析することで、現代英語での半動名詞構文の統語属性と意味属性を詳細に説明せねばならない。加えて、COHAを用いることにより、半動名詞構文がいつ出現したかを正確に同定すると同時に、半動名詞構文が成立した後の文法展開として、現在分詞以外の形容詞句、前置詞句、過去分詞句が準述詞として出現する時期も正確に同定せねばならない。これを達成するためには、当然、上記の複数の最先端の言語理論の内容を、最新の文献までつぶさに読むことで深く理解し、半動名詞構文を分析できる程度まで、身につけなければならない。膨大な資料収集とその観察、分析、そして複数の最先端言語理論の深い理解には、これまでの研究の積み重ねがあっても、この科研の最初の2年間で最低でも必要である。さらに、上記複数の最先端の言語理論を用いて半動名詞構文の成立過程とその後の文法展開のメカニズムを理論的に解明し、さらに現代英語でのこの構文の属性を理論的に説明せねばならない。これらを行い、かつ幾つかの学会で発表し、幾つかの論文にまとめるには、少なくとも残りの1年が必要である。より具体的には、次の計画で行う。

平成 28 年度：本科研で中心に扱う半動名詞構文については、私自身の研究論文として下記のものがあるが、生成文法の枠組みで本格的に論じたものは、私の知る限りない。伝統文法家は事実の指摘をしているけど、この構文の成立過程とその後の文法展開のメカニズムについては扱っていない。拙論 (i) 「英語における半動名詞構文について」 『言語文化論集』 第 10 巻, 第1号, 45-65, 名古屋大学. (1988). (ii) 「動名詞から分詞への変化: 動詞 *spend* の補部再考」 『言語研究の視座』, 154-171, 開拓社, 東京. (2015). (i) は、半動名詞 構文を現代英語の面だけに限って手作業から得られる資料だけを頼りに考察しており、現代英語の大規模コーパスを使用がきなかった時代の論考なので資料面でも理論面でも荒削りであり、骨格的な議論に多少残るところはあるかもしれないが、現時点ではさほど得るところがない。また、(ii) も、(i) の論考と同じく半動名詞構文について現代英語の面だけを論じ、(i) の分析に若干の修正を BNC からのコーパス資料を加えることで行っているにすぎない。このように (i)、(ii) とも動詞 *spend* が時間表現を取った後に生じる半動名詞構文の現代英語での属性の解明という非常に限られた研究であって、先程言及した *was two weeks/won't have a hard time/had difficulty/was very busy/kept himself at work/was already hard at work/had been at work/etc.* といった様々な環境に生じる半動名詞構文について一切研究がなされていない。また、先程述べたように、Arai, Yoichi (1997) "A Corpus-Based Analysis of the Development of "In Dropping" in the *Spend Time In V-Ing* Construction," *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, ed. by M. Ukaji et al, 181-196, Taishukan, Tokyo. は、半動名詞構文が 20 世紀前半頃に誕生したと主張するが、Arai の史的調査は 50 年刻みの調査をしているので、彼の調査からは半動名詞構文が出現した時期が実際のところ 19 世紀末なのか 20 世紀前半なのかは判然としない。また論文題目からもわかるように、これも動詞 *spend* が時間表現を取ったその後に生じた半動名詞構文だけに限った考察となっている。よって、史的大規模コーパス COHA を利用して、半動名詞構文全体の史的面について膨大な言語資料を本格的に収集する。収集した膨大な言語資料をつぶさに分析することで、半動名詞構文の出現時期、その他の準述詞の出現時期を正確に同定する。さらに、現代英語の大規模コーパス BOE (約5億語)、BNC (約 1 億語) 等を用いて半動名詞構文全体の現代英語の面に関しても膨大な資料を収集する。このように殆ど手が付けられていない構文であるので、今回の科研で新たに経験面でも理論面でも本格的に挑戦する。

(2) 複数の最先端の言語理論、生成文法の 統語理論、概念意味論、動的言語理論、加えて構文文法を深く正確に理解し、それらの言語理論の観点から、収集した現代英語の膨大な資料を鋭く深く分析することで、現代英語での半動名詞構文の統語属性と意味属性を解明する。同時にこれらの複数の言

語理論を考慮しながら、この構文の成立過程とその後の文法展開のメカニズムの解明を行う。これを達成するためには、当然、上記の複数の最先端の言語理論の内容を、最新の文献までつぶさに読むことで深く理解し、半動名詞構文を分析できるまでに、身につけなければならない。よって、生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法の進展についても把握する。

平成 29 年度: (1)上記平成 28 年度の研究計画を続行する。(2)半動名詞構文に関して、中心メンバーとしての現在分詞の準述詞、派生メンバーとしての準述詞である過去分詞、形容詞句、前置詞句のそれぞれについて、生成統語論、概念意味論、動的言語理論、加えて構文文法の観点から、詳しく考察する。具体的には、準述詞の部分が主動詞の項として振る舞うのか、付加詞として振る舞うのか、現在分詞の準述詞を派生させる場合に単純な前置詞削除分析で済ませることが可能であるのか、準述詞としての前置詞の生起には場所句としての前置詞句がなんらかの影響を及ぼしているのか否か、準述詞の形容詞句には、例えば stage-level 対 individual-level といった意味的制限があるのか等に関して平成 28 年度の計画(1)で収集した言語資料並びに平成 28 年度の計画(2)の作業を基盤に深く考察していく。(3)もう1つの構文である同族目的構文についてもこれ迄の科研では、史的側面については全く扱ってこなかったため、特にその派生的変異形と思える受け身形としての同族目的語構文、特定の同族目的語構文について、史的大規模コーパス COHA を利用して、言語資料の収集を行うとともに、上記の最先端の複数の言語理論から考察を加えることにする。

平成 30 年度: (1)意味的に非常に似た前置詞 in 付き動名詞構文が存在しているにもかかわらず何故前置詞 in を欠いた半動名詞構文が出現するのかその構文成立過程のメカニズムの解明を行う。また基本メンバーから派生的なメンバーへの文法展開のメカニズムの解明を行う。同族目的語構文についても特にその史的面に焦点をあてながら、構文成立過程とその後の文法展開のメカニズムを解明する。両者の共通点がないかを深く考察することでより一般的なメカニズムが存在するのかその解明に迫る。(2) 本科研の研究成果を日本英語学会、英語語法文法学会で口頭発表し、それら学会の機関誌に論文の形で投稿する。

#### 4 . 研究成果

平成28年度は、本科研で扱う半動名詞構文、とりわけ、動詞spendが時間表現を取った後に生じる半動名詞構文の歴史的成立過程とその後の展開を考察するために次のことを行った。(1)史的大規模コーパスCOHAを利用して、動詞spendが時間表現を取った後に生じる半動名詞構文に限って、史的発達に関する膨大な言語資料を現在分詞以外の述詞も含めて本格的に収集した。(2)Arai, Yoichi (1997) “A Corpus-Based Analysis of the Development of “In Dropping” in the Spend Time In V-Ing Construction,” 論文を検討し、Araiの史的調査は50年刻みの調査をしているので、彼の調査からは半動名詞構文が出現した時期が実際のところ19世紀末なのか20世紀前半なのかは判然としないことを明らかにした。また、半動名詞構文に含まれる現在分詞以外の述詞の史的展開に関する考察が欠けている点を明らかにした。(3) (2)でのArai論文に欠けた2点を(1)で収集した膨大な言語資料をつぶさに分析することで、半動名詞構文の出現時期、その他の準述詞の出現時期を正確に同定した。(4)(3)で得られた研究成果を「構文の成立過程とその後の展開」という論文にし、論文集『言語変化・変異と言語理論』(開拓社)に掲載していただいた。(5)東北大学大学院情報科学研究科言語変化・変異研究ユニット主催の講演会で招待講演者として、(4)の研究成果を含んだ講演「コーパスからわかる英語における周辺構文の諸相—動的な文法理論の立場から—」を行った。(6) 本科研の理論的な枠組みの1つである生成文法の語彙意味論に関して、『語はなぜ多義になるのか』(朝倉書店)の第3章「多義語の分析I—語彙意味論的アプローチ」を執筆した。

平成29年度は、本科研で扱う半動名詞構文、とりわけ、動詞spendが時間表現を取った後に生じる半動名詞構文に関して、中心メンバーとしての現在分詞の準述詞、派生メンバーとしての準述詞である過去分詞、形容詞句、前置詞句のそれぞれについて、生成統語論、概念意味論、動的言語理論の観点から、詳しく考察した。具体的成果としては、(1)半動名詞の部分からwh要素が抜き出せることを根拠に半動名詞は項として振る舞うとの結論を得た。(2)現在分詞の準述詞を派生させる場合に単純な前置詞削除分析で済ますことは、半動名詞補部を許す述語が複合的意味解釈を得るので不可能であるとの結論を得た。(3)本科研では、理論的枠組みの1つとして概念意味論を用いるが、そのために、私自身の理解を整理する目的と知識を研究社会に還元する目的を兼ねて、単著『概念意味論の基礎』を開拓社より上梓した。(4)本科研との関連で問題となってくる同じく英語の周辺部を構成する同族目的語構文について、同族目的語に修飾要素が何故義務的になるかを概念意味論から説明した。具体的には、Jakendoff (1990)の一連の付加詞規則に注目し、付加詞規則が持つ一般的な属性である非余剰性に同族目的語の修飾要素の義務性を帰着させることができるという趣旨の論文を執筆し、開拓社刊の論文集『ことばを編む』に収録していただいた。

平成30年度は、本科研で扱う半動名詞構文に関して、とりわけ、意味的に非常に似た前置詞 in 付き動名詞構文が存在しているにもかかわらず何故前置詞inを欠いた半動名詞構文が出現するのかその構文成立過程のメカニズムの解明を行った。また基本メンバーから派生的なメンバーへの文法展開のメカニズムの解明を行った。具体的成果としては、(1)半動名詞構文は、in付き動名詞構文に統語と意味の不一致が起き、それを解消する手段として意味に駆動された統語的再分析により、準述詞構文をモデルとして派生的に得られた構文であるとの結論を得た。(2)一旦、現在分詞を補部とする半動名詞構文が成立すると、準述詞構文をモデルとしたので、述詞パラダイムに沿ってその後の文法展開が起こり、変種としての形容詞句、過去分詞句を補部とした構文が生起し出すとの結論を得た。また前置詞句補部に関しては、元々spend+timeの後に生起し得たとの結論も得た。(3)研究社から単著『ことばの基礎2 動詞と構文』を執筆し出版した。その第6章に「他動詞と半動名詞構文」として本科研の研究成果を含めた。(4)日本英文学会中部支部より特別寄稿論文を執筆するよう依頼があり、本科研とも密接に関係する生成語彙意味論の研究を生成文法における意味論の自律性を示す証拠として再解釈することが可能であるとの観点から論文「生成文法における自律意味論の必要性」を『英文学研究(支部統合号Vol.11)』に掲載した。(5)第13回英語語法文法セミナーの講師を務め、本科研にも関わる生成語彙意味論の研究を「修飾との関係で名詞の意味の中身を探る」という題目で、現場の中高および大学の英語教師、英語学院生に社会還元した。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

(1) 大室剛志、「同族目的語の修飾要素の義務性と付加詞規則」『ことばを編む』、招待論文、査読有、2018年、pp.2-16. 開拓社.

(2) 大室剛志、「構文の成立過程とその後の展開 半動名詞構文を中心に」『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』、査読有、2016年、pp.64-77. 開拓社.

〔学会発表〕(計 2件)

(1) 大室剛志、「修飾との関係で名詞の意味の中身を探る」、第13回英語語法文法セミナー、招待講師、2018年8月6日、関西学院大学.

(2) 大室剛志、「コーパスからわかる英語における周辺構文の諸相 動的文法理論の立場から 」、東北大学大学院情報科学研究科言語変化・変異研究ユニット主催講演会、招待講演、2017年3月11日、東北大学大学院情報学研究科。

〔図書〕(計 3件)

(1) 大室剛志、『ことばの基礎2 動詞と構文』、2018年、pp.206、研究社。

(2) 大室剛志、『概念意味論の基礎』、2017年、pp.202、開拓社。

(3) 中野弘三、大室剛志、早瀬尚子、井門亮、石崎保明、前田満『語はなぜ多義になるのか コンテキストの作用を考える 』、2017年、pp.175、朝倉書店。